
[シンポジウム報告④]

千葉発地域創生 愛媛県今治市の事例に学ぶ



村川 庸子・浜本 憲一・安井 孝・藪内 正樹

質疑応答

A 千葉県のお話で印象に残ったのは、ブランド力が非常に弱いということでした。ただ私自身、30年間、グローバルな国境のない世界で資産運用の仕事をしていた経験から実感として思うのは、問題はブランドの発信力の弱さであり、決して日本はブランド力において英米に劣ってはいないということです。

世界はダブルスタンダードですが、日本は一つの法律に固執してしまいます。そこで千葉県に対してお願いしたいのは、今治市の話と照らし合わせて考えますと、千葉県だけでなく日本全体がそうなのですが、千葉県の方法の問題は、一つひとつのアセット、資産のことしか考えず、まとめてよりよくするという思考に欠けていることだと思いました。成田や幕張、かずさ、というせっかくの三角形があるのに、そのつながりがないのです。今後はそういったソフトを大事にするような考え方を導入されればよいのではないかと思います。すでに「一つの市」「一つの県」などという狭い範囲でものを考える時代は終わり、横の連携、他都市との連携が国内外で生まれたら面白いのではないかと思います。

B 私も千葉に長く住んでおり、私の故郷でありながら、千葉の名産といわれましても、ピワとピーナツしか思い浮かびません。テレビでは旅番組など、様々なシーンで「千葉」は出てきますが、その特徴は感じられません。

私の質問は二つありまして、一つは成田空港、私が新聞報道などで知っているのは、今アジアでのハブ空港の争いが非常に激しいということです。北京なのか仁川なのか、あるいは成田と東京を合わせた東京なのかという、東アジアのハブ空港化への展望についてと、来年伊勢志摩でG7サミットが開催されますが、千葉県でサミットを誘致すると

したらどこを考えますか、ということをお教えてください。

浜本氏(以下、浜本) ありがとうございます。1人目の方と2人目の方に併せてお話をしたいと思います。魅力の発信を色々と組み合わせる実施すればどうかというお話、まさにそのとおりだと思います。私は去年魅力担当部長として発信を担当していたのですが、色々なメディアと連携をし、タイミングを合わせて一気にPRするメディアミックスという手法がありますが、このようなことが非常に大事です。それから物語性を持たせることです。千葉県の中には色々な財産がありますので、それを連携させて一つのストーリーにすることで、売っていくというのもまた非常に大事なことです。これは私の思いでもあり、おっしゃるとおりだと思います。

一つの県だけではなく他地域との連携の必要のお話がありました。これもまたそのとおりです。成田空港を擁している県ですので、成田からは現在国内17都市に飛んでいます。それら都市と組んでいくというのは非常に大事だと思います。諸外国から来られる方は日本に来るのであって、千葉だけに来るわけではありません。日本を楽しんでもらう、その中で千葉も楽しんでもらいたいのです。

金沢と組んで千葉ができることは、北海道の雪とディズニーランドを併せて楽しんでいただく、こうしたことが大事だと思っています。観光担当部門はその発想で、各地域と連携を取っていかうとしています。

成田空港の話ですが、これは東京、つまり羽田と成田で、世界の、アジアのハブ空港を狙っていくべきだと思います。海の轍を踏んではなりません。かつて神戸港と千葉港が港湾取扱量日本一を争っていました。阪神淡路大震災という不幸なこともあり、神戸港は世界の港湾のハブから脱落してしまいましたが、実はもうその前から、神戸港の脱落は徐々に進んでいました。

残念ながら東京港、千葉港もその点ではやはり香港との競争に負け、ハブの機能を持っていません。空港の競争においても同じようになってはいけませんので、やはり東京、羽田と成田の連携で頑張っていこうと思っています。これは頑張るしかないです。

そのときに何が大事かといいますと、空港機能をしっかり強化していくこと。成田の貨物ハンドリングは優秀で評価が高く。容量と質との競争力をしっかり確保することが重要です。

一方で、日本に魅力があるということです。やはりものが入り、出していくということは、よいものを日本で作る、作って出していくこと、日本もよいものを買って、ビジネスでも、観光でもよいのですが、日本に来たらビジネスができると、楽しいと、こういうのを作らないと人やものの流れはできません。航空の世界では人やものの流れのない所には、ハブ空港は成り立たないと思います。

それから伊勢のサミット、千葉でのサミットを誘致するとすればどこがよいかということですが、実は千葉でサミットの検討がされたことが何度かあります。千葉は十分にその可能性、ポテンシャルはあると思いますが、最近は東京圏以外で開催する流れにありますので、千葉開催はなかなか難しいかと思っています。ただし狙いどころはあります。オリンピックも同様に、日本でサミットが開催されるということは、サミットそのものは伊勢志摩ですが、その前に課長会議、局長会議など実務ベースの催しは東京圏で開くことが多いので、そこはしっかりと国際会議を狙っていくと、これは大事なことだと思

います。

ちば国際コンベンションビューローという組織があり、ここで営業をしています。コンベンション、国際会議などは5年単位、10年単位で開催実現に向けての交渉、調整が行われています。

村川教授(以下、村川) 今治の方に何か、コメントやご質問はありませんか。

C 本日は今治の方が遠くからお見えです。世界に名だたるブランドである今治タオルの新たな展開をお聞きかせ願えると、勝手に想像をしながら参加しましたが、新しい食育の部分でのお話も聞かせていただきました。これはこれで一つの方法だと思います。

村川教授

ただ逆に世界的なブランドであるタオル。タオルといえば今治、これはその後どうなり、また再生していくのか、あるいは新しい方法を模索する、こういうような動きはあるのでしょうか。……そういう物の見方は、千葉の新しいブランドを作っていく一つのヒントになると思います。

安井氏(以下、安井) 地方都市というのはどこでもそうだと思うのですが、どこかのメーカーの下請けという、特にもの作りの産地ですとブランドは他所が持っていて、そのメーカーの要望にいかにも早く、安く応えるか、それが賃織りの請負産業です。まさに今治タオルの最盛期は今治市内に550社のタオル工場があったのですが、オイルショック以降、構造不況で中国製品との競争で、セーフガードの発動間近というところまでいきました。大きな問屋が1社倒産すると、タオル会社、染色会社、縫製会社まで連鎖倒産が起こるということを繰り返してきました。

生産量は日本一でしたが、今治タオルというブランドはありませんでした。今でも世界のグッチやルイ・ヴィトンなど、名だたるファッションメーカーのブランドのタオルは今治で作ってるのですが、これは今治から発信をしてはいけなくなっています。それは今治市民でさえ知らないほど、言っただけいけないことになっています。

しかし、業界そのものがなくなるのではないかという危機感から、先ほど申し上げたJAPANブランドの関係もあり、今治ブランドを作ろうではないかという気運が高まり、問屋に言われたモノを売るのではなく、今治自身が売っていくタオルを作ろうという発想に切り替えたのです。そこで、佐藤可士和さんという有名なデザイナーの方にプロデュースをお願いし、今治の独自性や技術を用いて、世界に通用するタオルを作ろうと、それをブランド基準に入れています。

今治タオルを1センチ角にし、コップに張った水の上に浮かべると、5秒以内に沈むという吸水性基準がありますが、他産地では現在、真似のできない品質です。それをクリアしたものに、佐藤可士和さんが考えた「i」の字をモチーフにした今治タオルのロゴマークがあり、それをタオルに貼ることによって、一気に高品質タオルというブランドをつくり上げています。

また、タオルソムリエ制度を創設し、全国の販売員にその資格を取得してもらい、用途に合わせて多様なタオルの種類を選び方をお客さんに説明したり、東京でもリッツ・

カールトンのような世界的なホテルに、高品質な今治タオルを使っただくといい、販売戦略とブランド戦略を同時に展開しており、好調です。

今治タオルは既に海外を視野に入れ、今年の秋には、パリに今治タオルのお店を出す予定です。オリンピックのタオルとして採用や、選手村への出店など、水面下での働き掛けを行っているところです。

村川 あとおひとかたと思いますが……。

安井 現在、全米オープンゴルフが開催されていますが、4月に全米女子オープンがありました。LPGAという、全米女子プロゴルフ協会による全米女子オープンのスポンサーが全日空です。大会の優勝者は池に飛び込むという習わしがあるのですが、そこで全日空と四国タオル工業組合がタイアップをし、池に飛び込んだ優勝者にかける白いガウンに今治タオルを採用させていただきました。

ただ、全日空のANAというロゴが入っており、その映像は現在、今治市が使用することができません。インターネットからの閲覧は構わないのですが、LPGAのインターネットの映像の使用には許可が必要です。

D 敬愛大学の青木です。浜本さんが講演されるとのことです。今治の話も聞け、非常に充実したシンポジウムでした。

私も千葉県のことに色々関わってしまっていて、浜本さんの、圏央道が通じたことにより半島性がかなり薄れたという見解について、私としましては必ずしもそうではない気がしています。圏央道は全通しないといけなかったのです。現段階では東京湾アクアラインが唯一の頼りで、あとは等間隔ということで、肝心の南房総方面は取り残されています。そうすると南房総方面は半島性という特質を逆に活用でき、半島であるからこそ東京の人が行きたくなるような、そういった側面での千葉県の発展の仕方もあるのではないかと、先ほどの安井さんのお話をうかがいながら、それは可能なのではないかといい気がしていました。感想ではありますが、何かお考えはありますか。

浜本 青木先生のおっしゃったことは、まさに私も言いたかったことです。やはりこの半島性を脱却するためには、東京湾アクアライン、圏央道、そこにつながる道路をきちんと整備していくことが大事です。それはこれからしっかりとやるべきことです。

半島性という特質を逆手に取っていくのも大事なことで、例えば、外房の一宮町という小さな町は、外房の中にありながら長い間、人口が右肩上がりです。以前一宮の町長さんとお話したのですが、若い人が増え、子どもも増えているそうです。一宮といえますとサーフィンです。非常によい波が来る場所で、サーファーが移り住んでくるのです。

さらに、一宮町は快速の始発です。1時間半で東京まで座って行くことができます。サーファーは朝の4時頃から波に乗り、始発の電車に乗って仕事に行くのです。

ワーク・ライフ・バランスという言葉があります。交通網の発展、鉄道、道路、交通網の整備、地域の雇用の場の確保により、その土地の楽しさを享受しながら、自分の生活も大切に、また仕事もしっかりできる、そのような一宮町のあり方は、千葉県にとってよいヒントがあると思います。移住、定住の促進も、千葉県はそのような考えに基づいて進めるべきではないかと思っています。

村川 ありがとうございます。

私はあと1年、総合地域研究所長の任期が残っていましたので、早めに仕事を済ませようと、今回の企画をどんどん進めていました。最後の年でしたので、安井さんにはぜひ、講演をお願いしたいと思っていました。また、浜本さんにお目にかかれた時には、「しめた」と思い、依頼をしました。

色々な話をおうかがいしながら不思議に思ったのは、浜本さんは千葉県が大好きでいらっしゃるのに、言葉に少し関西のなまりがあることです。安井さんのお話には数々の方言が出てきましたが、浜本さんの口調には所々に関西弁が表れます。そのイントネーションは、京都や大阪ではないし、山口、広島でも高知でもなく、「ご出身はどちらだろう」と思っていましたら、香川県とのことでした。そして、香川県出身の方が千葉が大好きだということが、千葉県の特色だと述べられました。今回のシンポジウムに最適な方を見つけられたと自画自賛しています。

一年早く、別の職務に移ることになりました。所長としての最後の仕事にと思っていたシンポジウムに、大勢の方に参加いただき、無事に終えることができました。大変感謝しています。もう一度、本日の講師の先生方に拍手をいただき、シンポジウムを閉めたいと思います。どうもありがとうございました。

むらかわ・ようこ Yoko Murakawa
はまもと・けんいち Kenichi Hamamoto
やすい・たかし Takashi Yasui
やぶうち・まさき Masaki Yabuuchi